

昭和49(1974)年8月、野田市で中島斌雄主宰の俳誌『麦』夏季鍛錬大会が開催されました。この句は、そのとき、吟行先の関宿閘門で斌雄が詠んだ句です。

「青い空のもと、真みどりの芦荻につつまれて、大利根は悠容迫らずに流れていた。その水路にも幾多の変遷があったにちがいない。その変遷につれて、川沿いの町々にもさまざまな変貌があったことだろう。城が亡び、船が変わり、そして人が移った。しかもなお利根川は流れ続けている。そんなことを考えながら、私どもは、関宿の閘門のほとりに佇んでいた。(斌雄)」(『麦』昭和49年10月号後記より)

鉄壁を成しているのは閘門ですが、黒蜻蛉の存在感がそれと一体化するように詠まれており、戦後の現代俳句の新しい潮流を感じさせる作品となっています。

昭和31(1956)年、『麦』の吟行会が野田市内の公園で行われた際、歓待の中心にいたのは地元の俳人河合凱夫でした。これをきっかけに凱夫は、後に『麦』の同人として活躍、中島斌雄を師と慕い、昭和42(1967)年に創刊され、現在も続く野田生まれの俳誌『軸』を主宰しました。

斌雄は、河合凱夫句集『飛礫』の序の中で、上記夏季鍛錬大会の際に集合場所だった野田市駅に降り立った印象をこう述べています。「野田線の野田市駅で電車を降りると、もうあたりに醤油特有のにおいが漂う。野田は今さら喋々するまでもなく、醤油の町である。市内の人口の六割までが醤油につながって生きているともいう。野田は文字通り醤油の町、ことにその大量醸造・近代的生産史上、忘れることのできない、重要な地域である」

斌雄は、戦後の新しい俳句の作風を野田にもたらした俳人として、現在も野田俳壇に敬意を表されている大家の一人です。(文中敬称略)



土手に佇む斌雄

【取材協力・資料提供】俳句図書館 鳴弦文庫 館長 河合章男氏 野田市宮崎95-4

【参考文献】句集『飛礫』(軸叢書Ⅱ)『中島斌雄全句集』(麦の会)『麦』第29巻第7号(通巻263号)・同巻第10号(通巻266号)



中島斌雄(1908～1988)

句歌で巡る
野田

17

中島 斌雄

なかじま たけお

閘門の鉄壁を成す黒蜻蛉

明治41(1908)年 10月4日、東京市芝区(現在の港区)生まれ。本名は武雄。父親は金モール簾箔店を手広く営んでいた。

大正11(1922)年 私立旧制芝中学(現・芝学園)に入学。中学時代、小野無子に指導を受ける。

昭和5(1930)年 東京帝国大学文学部国文科入学。東大俳句会「草樹会」に参加、同窓の中村草田男と会の幹事をつとめ親交を深める。高浜虚子の指導を受けて『ホトトギス』『馬酔木』に投句。

昭和14(1939)年 11年に創刊した同人誌『季節風』に「定型への懷疑」を書き一時俳句を離れたが、人間探求派に刺激を受け、号を斌雄と改め作句を復活。

昭和21(1946)年 『麦』創刊。知的で清純な詩情を核として常に新しい方向を追究していく。

昭和22(1947)年 現代俳句協会創立に参加。のちに協会副会長を務める(昭和51年)など長きに渡り俳壇に寄与。

昭和43(1968)年 北軽井沢に山荘「月土山房」を開き、以来、思索、創作の場として愛用。

昭和63(1988)年 3月4日、80歳で永眠。墓所は港区元麻布の本光寺。



関宿の閘門(利根川と江戸川を船が航行するため昭和2(1927)年に設けられた)

【中島斌雄の主な著書】

句集『樹氷群』(昭和16年)『光炎』(昭和24年)『わが噴煙』(昭和48年)『肉声』(昭和54年)『午後』(昭和56年)
著作『現代俳句全講』(昭和37年)『現代俳句の創造』(昭和56年)